

共同研究 ● 平和・紛争・暴力に関する人類学的研究の可能性 (2008-2011)

この共同研究の3年目が終わった。私たちはこのプロジェクトを、「平和」というテーマに関心がある人類学者、および人類学的アプローチに関心がある他分野の平和研究者や市民社会アクターの「フォーラム（開かれた議論の場）」として実施することを目指してきた。吉田憲司はある美術史家に拠りながら、「フォーラムとしてのミュージアム」、すなわち「未知なるものに出会い、そこから議論が始まる場所」という考え方に民族学博物館の将来をみている（吉田 1999：216）。多様なアクター間の対話へと開かれ、そしてそうした対話の中で形成され続ける場としての「フォーラム」の概念は、ここ国立民族学博物館における私たちの共同研究に対しても重要な指針となってきた。2010年度はまさにこの方向性がある程度実現したといえる。計4回の研究会の内、ここではフォーラムとしての性格が色濃く出た2回の内容を紹介したい。なお、他の2回は平和資源と平和展示をテーマにメンバー内部での研究会を行なった。

死と平和

2010年12月5日に開かれた研究会は平和学と文化人類学の対話の場となった。特別講師の一人内海愛子は、朝鮮人BC級戦犯や日本の戦後補償などに関する著作で知られ、長年にわたって平和運動にも関わってきた人である。もう一人の波平恵美子は、「ケガレ」概念や医療人類学の分野から日本文化の研究を続けてきた。

両者はそれぞれ日本平和学会および日本民族学会（現・日本文化人類学会）の会長を過去に務め、両分野を代表する研究者といえる。この二人を招いて議論したテーマは「死と平和」であった。特にアジア太平洋戦争に関わる死者の遺体の扱われ方を共通の論点として設定した。

内海は「遺骨の戦後史」と題する発表で、朝鮮人強制動員犠牲者ならびに日本人戦没者の遺骨問題を取り上げて、この問題が戦後の日本政府のみならず市民による平和運動においても注意が向けられてこなかった点を指摘した。さらに、国家による「軍人・軍属・軍夫」と「民間人」の区別、軍が行なう「戦死」と「戦病死・戦傷死」の選別、戸籍制度に基づく「内地人」と「朝鮮人・台湾人」の分類などを通して、死者の間に差別が加えられていくシステムを分析した。

波平は、明治以降、日本国家が日本人戦死者の身体と霊魂を専有するようになり、死者儀礼の権利を奪われた遺族が、結果的に国家による戦死者の英霊化を支えることになる歴史的過程を「無言の結託——死者と生者、国家と家族」という演題のもとで報告した。また波平によるとこの「結託」は、イエ

制度を背景に戦死者と遺族とが同一視されることによって強められた。

この研究会では、平和学と文化人類学との協働の意義が示されたと思う。つまり「死者の戦争動員」ともいえるような事象に対しては、権力と文化の分析が共に必要であり、この対話的協働を通して両分野の強みが発揮されるということである。こうした「死の文化政治」を解体する、「死者を含めた平和構築」とはいかなるものかという問題を次の機会に論じれば、さらに刺激的な成果が得られることだろう。

内海は政府と市民が共に遺骨問題を等閑視してきたことを指摘した。これは文化人類学者にも当てはまるであろう。東南アジアやオセアニアという日本の文化人類学者になじみの「フィールド」の多くは、かつての戦場と重なり、そこには戦没者の遺骨が残され、それをめぐる多様なアクターの実践がみられるはずである。この問題をいかに研究の射程に加えるかが問われている。



南風原文化センターで共同研究メンバーの前に話をする大城和喜。

沖縄における平和の表現と展示

沖縄はアジア太平洋戦争の末期に極めて過酷な地上戦が行なわれた所である。さらに明治政府による支配、戦後の米軍による占領と基地建設など、日本において「平和」を考えるとときに避けて通れない歴史性が刻まれている。また沖縄は文化人類学者や民俗学者によって研究対象とされてきた。この関係性についても問い直さなければならない。

2011年2月18、19日に私たちは現地の方々を交えて研究会を開催した。その際の焦点は、沖縄において戦争と平和とが表現・展示されている現場を訪ね、それぞれで従事する人々との討論を行なうことであった。ここでは紙数の制約から2日間の豊富な研究会の内容は後日発表する出版物に譲り、個人的に印象に残った点のみ触れるにとどめたい。

ひめゆり平和祈念資料館では、映画「ひめゆりの塔」を通して作られた「ひめゆり学徒隊」のイメージと、元学徒隊員が伝えたいメッセージとのギャップを感じた。見学者の多くは、前者のイメージを抱えて館を訪れる。そのイメージを意識化させ、批判的に振り返る工夫を組み込むことが、メディア・リテラシーの点からもユニークな試みとなるのではないかと思われた。

沖縄県平和祈念資料館の「住民の視点」からの平和展示は意義深いコンセプトである。そしてこれは証言の展示などでよく実現されている。それと共にここでは「戦争の悲惨さ」を強調することで「平和の尊さ」を暗に伝えるという、もう一つの平和展示のコンセプトが背景にあるように私は思った。



アトリエ・神猫工房での花城郁子(手前)と共同研究メンバーとの対話。

「住民の視点」を重視するコンセプトをさらに追及するならば、違った展示内容もありえるかもしれない。そう私が感じたのは、丸木位里・俊夫妻の「沖縄戦の図」の展示で有名な佐喜眞美術館においてであった。佐喜眞道夫館長によると、地元の「おじい、おばあ」たちが戦前にあった立派な松並木(「宜野湾並松」)のことを思い浮かべるとき、「目がスーッと遠くなる」そうである。おじい、おばあたちにとって、戦争とはそうした美しいもの、かけがえのないものを破壊し、奪い去るものであった。美しいものの記憶、平和の世の記憶を再現するような展示を通して、ポジティブに「平和の尊さ」を伝えるという経路も一つあるのではないだろうか。

「祈り」をキーワードに美術作品を創作する花城郁子の神猫工房でも濃厚な対話を体験することができた。その中で例えば、普天間基地を見下ろす公園で、ある琉球大学の学生が発したという「アメリカ兵の幽霊を見たことがあるか」という問いかけから始まる話が強く印象に残った。花城によると沖縄では日本兵の幽霊の話はたくさんあるが、アメリカ兵の幽霊の話はないのだという。そしてもし「私たちがアメリカ兵の幽霊をみたときには、私たちの沖縄戦は終わると考えています」とのことであった。これは沖縄の人々が、かつての「他者／敵」であるアメリカ兵の、人間としての犠牲を具体的に感受するということであろう。

南風原文化センターは、行政と町民とが協力して作り上げた場である。ここには戦時中の外科壕跡の再現のような戦争展示だけでなく、南風原町民の移民体験、地元の民俗芸能・文化についても豊富な展示がなされている。さらに町の努力で、外科壕跡が戦争遺跡としては日本で最初に文化財に指定された。中央公民館元館長の大城和喜による話で興味深かったのは、足もとにある「文化」を掘りおこすという姿勢である。戦時体制が進むと地域の民俗芸能(アシビ)が禁止された。また戦後には首里城のようなものが「文化」で、「南風原に文化はない」といわれていた。そうした中で、足もとに眠っている文化を再発見し、復活させていったのである。大城はこの文化

を平和と重ね合わせる。それらは共に、地域の人々が楽しく豊かに暮らすことだからである。

関係を育てる成果に向けて

以上で述べてきた成果を踏まえながら、これから私たちはそれを発表する段階に入っていく。論集、学会発表などのオーソドックスな媒体にとどまらず、パフォーマンスや企画展示などの形を取ることも考えられる。いずれにせよ、その際の要点は「関係を育てる成果」ということだと思っている。

「本を出しても活用しなければ単なる印刷物」とは、^{あざ}字単位で郷土の歴史を掘りおこし、積極的に出版を進めてきた南風原町の大城による至言である。南風原で本の作成とは、出して終わりの仕事ではなくて、人とコミュニティを育てることと密接に関わっていることがうかがえた。作成の中で人を育て、関係を形成し、また出版後に活用される研究成果とはいかなるものだろうか。これは当たり前前の視点であるが、その当たり前前のことの大切さを南風原で改めて気づかされた。

平和には様々な定義があるが、私は関係論的な平和観を重視している。これは他者との関係性を形成する実践として、積極的に平和を定義する立場である。この立場に立てば、関係を育てるということは、すなわち平和を育てることである。そしてこの立場からの平和研究の成果もまた関係を育てる働きをすることが望まれる。それはフォーラムとしての共同研究とその成果が、ささやかな平和資源となることを意味するだろう。

平和には様々な定義があるが、私は関係論的な平和観を重視している。これは他者との関係性を形成する実践として、積極的に平和を定義する立場である。この立場に立てば、関係を育てるということは、すなわち平和を育てることである。そしてこの立場からの平和研究の成果もまた関係を育てる働きをすることが望まれる。それはフォーラムとしての共同研究とその成果が、ささやかな平和資源となることを意味するだろう。



宜野湾市の佐喜眞美術館。

【参考文献】

吉田憲司 1999 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』 岩波書店。

おだ ひろし

北海道大学大学院文学研究科准教授。専門は文化人類学。ドイツ史に関わるインフォーマルな和解と平和構築について研究を行なっている。著書に『エスノグラフィー入門：(現場)を質的研究する』(春秋社 2010年)、『質的研究の方法：いのちの(現場)を読みとく』(波平恵美子と共著 春秋社 2010年)、監訳書に『新版 質的研究入門』(U.フリック著 春秋社 2011年)など。